

J T S U - E 水地申第 4 号

2 0 2 2 年 9 月 1 5 日

東日本旅客鉄道株式会社

水戸支社長 小川 一路 殿

J R 東日本輸送サービス労働組合

水 戸 地 方 本 部

執 行 委 員 長 黒 澤 純 一

「中編成ワンマン運転」拡大に伴う

営業列車でのハンドル訓練の中止を求める緊急申し入れ

地本は、2022年6月29日「中編成ワンマン運転の拡大」の提案を受け、新たに常磐線水戸～いわき間において、中編成ワンマン運転を実施する考えが示されました。

会社は、「変革 2027」に基づく業務の見直しの中で環境の変化や技術革新の進展に対応しながら、より少ない人数で効率的な列車運行を行うことを目的に「中編成ワンマン運転の拡大」を行うとしています。そして、施策実施に向けた教育・訓練の内容として、乗務員のハンドル訓練は臨時列車を設定せず、営業列車を使用してハンドル訓練を行うことが提案の中で明らかになりました。

今回、ハンドル訓練を営業列車で行う根拠として会社は、臨時列車を新たに設定する必要が無いこと。営業列車のため毎日実施することが可能になること。水戸線でのハンドル訓練時に「実際の乗降がなくリアルな感覚が分からない」等の社員の声を踏まえ、営業列車でハンドル訓練を行うこととしたと述べています。

一方で、車両運用上の調整はあるにせよ、試運転列車で訓練を行うことは可能であることも会社回答から明らかになっています。

この間、水戸線「中編成ワンマン運転」導入時には、臨時列車を設定した上で勝田～小山間の一往復でハンドル訓練が実施され、その中ではワンマン運転の基本動作、ワンマン機器の操作、更に実際にドアに傘などを挟み、仮説を設定してモニターの見え方や死角などの視認性の確認など、多岐にわたり技術の習熟を行ってきています。しかし、今回ハンドル訓練を営業列車で行うことにより、これらの訓練項目が十分に習熟出来無くなることは言うまでもありません。

また、車掌も乗務する中でのハンドル訓練であり、出発合図を事前に打ち合わせて「車内ブザー式」に変更し、車掌は状態監視を行うがドア扱いを行わないこととしています。しかし、ホーム上の安全確認などにより車掌がホームに降りる場面も想定されるなかで、運転士はワンマン運転に集中している時に車掌がホームに取り残される可能性も大いに危惧されます。よって、会社が提案時に示した営業列車による訓練内容では、事故・事象につながる危険性が孕んでおり、到底認められるものではありません。

更には、水戸線において「中編成ワンマン」導入当時、連日のように列車の遅れが発生

していました。それは、基本動作や機器操作の不慣れから発生したことも要因としてあり、新たな線区で営業列車によるハンドル訓練を行えば列車の遅れが発生する事は火を見るより明らかです。そのような安全安定輸送やサービス低下を前提とした列車をお客さまに提供することは絶対にあってはなりません。

よって、乗務員の教育・訓練の充実を図ることと、安全で安定した列車の提供をするため、下記の通り申し入れますので会社の誠意ある回答を求めます。

記

1. 常磐線における営業列車でのハンドル訓練を中止し、試運転列車での訓練を実施すること

以上